

首座主教会議コミュニケ

ヨルダン、2020年1月13日～15日

いと高きところには栄光、神にあれ、平和、御心がすべての人にあれ。私たちの主イエス・キリストの御名により祝福を送ります。

- 1) アングリカン・コミュニオンの首座主教たちは、ジャスティン・ウエルビー、カンタベリー大主教の招待を受け、また、エルサレム教区ならびにスヘイル・ダワニ大主教の歓待のもと、2020年1月13日から15日にかけて、ヨルダンで会合を持ちました。
- 2) 私たちの会議は、祈り、聖餐の sacrament、聖書研究を通じた神のみ言という賜物を分かち合うことに基礎づけられたものでした。私たちは、共に聖餐を分かち合う中での一致を喜び、また、キリストご自身が洗礼を受けられた場所に繋がるヨルダン川で共にする閉会の祈りの中で、自らの洗礼の約束を更新することとなるでしょう。
- 3) 会議が持たれた場所は非常に意味深いところでした。私たちは、聖書の土地であるヨルダンに集められたのです。そこは、イエスが死に、そしてよみがえられたエルサレムのすぐ近くでもありました。会議の終盤、グループに分かれて、モーセが約束の地を眺めたネボ山、エルサレム、ベツレヘムへと、それぞれ巡礼に出かけます。共に過ごす中で、この地域におけるキリスト教の長い歴史と、今日、中東のキリスト者が直面する圧力に思いを馳せました。エルサレム正教会総主教テオフィロ 3 世と面会し、歓迎の言葉を受けたことを感謝しつつ、私たちは、「エルサレムの平和のための祈り」(詩編 122:6) を唱えました。ヨルダン国王アブドラ 2 世の謁見の栄誉にも浴しました。国王は、異なる信仰を持つ人々が、その違いにもかかわらず共に生きることができるために尽力すること、また、この地にあるキリスト者を支援することを、力強く語ってくださいました。アンマンの自宅に私たちを迎えてくれたサルフィティ家の温かいホスピタリティにも感謝しました。
- 4) 首座主教として集められた私たちは、アングリカン・コミュニオンの現下の緊張について、当然ながら意識していました。しかしながら、共に歩むことを促す、私たちのただ中におられる聖霊を深いところで感じ取ってもいたのです。私たちは、人々と国々の間の和解という賜物についての、日本聖公会の首座主教による心揺さぶられる証しに耳を傾け、私たちがこの場にあることを喜びつつ、会議を終えたのでした。
- 5) 40 管区中 33 管区から首座主教が出席しました。3 名の首座主教が出席しないことを選択し、4 名が、空位、病気、もしくはその他の困難ゆえ、出席できなかったことは残念なことでした。私たちはいつも、仲間の不在を大いに嘆くものです。

- 6) 私たちは、今回、首座主教会議に初めて参加された 12 名の新首座主教、とりわけ、新しく誕生したチリ管区首座主教を歓迎しました。また、任期を終えようとする首座主教に別れを告げました。私たちが共に集められている最中に、南ケララ主教のダルマラジ・ラサラーム師が、南インド教会(CSI)の議長に選出されたという報せを受けました。私たちは、ラサラーム師が 担う新たな働きに祈りを合わせると共に、次回の首座主教会議に迎えることを楽しみにしています。私たちは、エジプト、北アフリカ、アフリカの角と呼ばれる地域を管轄する新管区、アレクサンドリア管区の設立を承認しました。また、スリランカ管区形成の進捗も確認しました。
- 7) 私たちは、世界中から共に集められ、それぞれの国、教会における多様な状況を持ち寄り、分かち合い、祈り合うことができました。世界のさまざまな場所で、キリスト者は深刻な圧迫に直面しています。それは、キリスト者としての生活と働きを困難なものとし、時には耐え難い状況へと追い込んでいます。私たちは、一つのからだであるがゆえに、これらの兄弟、姉妹たちの強靱さと誠実さによって強められるのです。首座主教会議として、私たちは、世界中における平和、正義、そして和解のために心から祈ります。とりわけ、南スーダン、スーダン、コンゴ民主共和国、ボリビア、チリの人々を覚えます。森林火災のただ中にあるオーストラリアの人々の状況に心を痛めます。ラテンアメリカをはじめ、世界各地で、移住と立ち退きにより影響を受けている人々のために引き続き祈ります。カイバル・パクタンクワ州政府による、100 年以上もの歴史を持つキリスト教大学であるエドワードス・カレッジの接収に懸念を持っており、州政府が、教会の権威によるカレッジ運営の回復という観点から、パキスタン教会ベシヤワール教区との対話に入るよう求めるものです。
- 8) 子どもたち、そして傷を負う人々を守ることは、引き続き重大な関心が払われるべき課題です。過去、そして現在における虐待という事実は、痛みと後悔は終わることがないという問題でもあります。私たちは、「セーフチャーチ委員会」(Safe Church Commission)の進捗報告を聞きました。教会が過ちを犯し、また今もなお過ちをし続けていること、教会が配慮すべき人々を守れていないことを悔い改めます。私たちは虐待から生還したすべての人々の声に耳を傾け、共に働くことを今一度誓い、再確認いたします。そして、私たちの教会の内に安全な環境を備えることを決意するものです。
- 9) 私たちは、気候変動は将来の脅威ではなく、今日、世界の多くの地において現在進行形の現実であることを強調する「聖公会環境ネットワーク」(Anglican Environmental Network)の報告を聞き、またその働きに感謝しました。
- 10) 私たちは、福音伝道に献身することを再確認し、新設された、「聖公会プランティング委員会」(Anglican Planting Commission)の働きを支持するものです。
- 11) 私たちは、すべてのアングリカン・コミュニオンに属する諸教会が、「全聖公会予算」(Inter-Anglican Budget)の主旨に従って、貢献すべきであることに合意しました。また、決定された各教会の貢献に関する新たな設定への移行を推奨するものです。

- 12) 2016年の首座主教会議において、カンタベリー大主教は、直面する複雑な状況にも拘わらず、いかに私たちが共に歩むことができるかを検討するタスク・グループを立ち上げることを求めました。今回の首座主教会議で私たちは、共に歩むことに献身し続けることを確認しました。私たちは、タスク・グループの作業を受任し、他のアングリカン・コミュニオンの器—ランベス会議、ACC（全聖公会中央協議会）に推奨しました。私たちは、タスク・グループの作業の継続を委託されたグループが、ランベス会議という光の中で、私たちがいかに共に生き、働くことができるかを探究することを勧めました。また、私たちは、アングリカン・コミュニオンの諸教会が、大斎節第5主日（2020年3月29日）を、タスク・グループが作成した「悔い改めの祈り」に焦点を当てる日として、特別に過ごすことを推奨するものです。
- 13) ランベス会議は、今年、カンタベリーで行われます。私たちは、会議の計画について、実施概要、プログラムの両面から理解を新たにしました。私たちは、ランベス会議での議論の果実を、いかに広範に共有することができるかを協議しました。また、神の世界のために神の教会を建てるという神の宣教において協働するように、ランベス会議に共に集められた主教たちが、いかに教会と世界を「招く」ことができるかを探究しました。また、私たちの違いの中で、共に歩むことの意味を探る時に、ランベス会議が、この旅と、現在登録している650名の主教と506名の主教配偶者にとって、きわめて重要な要素であることを確認しました。タスク・グループの作業は、二人の弟子たちが、復活されたキリストと出会っているとは知らずにエマオへの道行きを旅する物語（ルカ24:13-35）を私たちに思い起こさせました。キリストがパンを裂かれた時に、その人が主であることについて気づき、弟子たちは永遠に変えられるのでした。彼らは同一の人間ではあるけれども、変えられるのです。そして、彼らは、新たに見出した喜びの中で、ご復活の良き知らせを宣べ伝えるために、エルサレムへと戻るのです。
- 14) 首座主教会議を実務面からサポートしてくださったアングリカン・コミュニオン・オフィス(ACO)とランベス・パレスのスタッフ、祈りをもって私たちを支え、見守ってくださった聖アンセルムス修道会(Community of St Anselm)とシュマン・ヌフ修道会(Chemin Neuf community)、そして、私たちを歓待し、支援してくださった聖公会エルサレム教区大主教とスタッフのみなさんに感謝するものです。
- 15) 会議を通して、共に集い、共に歩み、共に在り続けるようにと私たちを招いておられる聖霊の臨在を強く感じるようになりました。この会議の期間中、私たちのために祈ってくださった世界中の人々の祈りに深く感謝いたします。また、自分たちの管区、そして、アングリカン・コミュニオンに、全能なる神の配慮と御導きが与えられるために、私たちは自ら献身することを誓います。

ヨルダン

2020年1月15日